

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

| | |
|------------------|---|
| Title | 慶應義塾大学国文学研究室蔵「月日の本地」解題・翻刻 |
| Sub Title | |
| Author | 石川, 透(Ishikawa, Toru) |
| Publisher | 慶應義塾大学国文学研究室 |
| Publication year | 2000 |
| Jtitle | 三田國文 No.32 (2000. 9) ,p.43- 57 |
| JaLC DOI | 10.14991/002.20000900-0043 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20000900-0043 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学国文学研究室蔵

「月日の本地」解題・翻刻

石川 透

解題

『月日の本地』は、継子いじめを題材とした本地物として、興味深い作品である。松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』一九八二年刊）によれば、その本文系統は、大きく、古活字版と整版を含む版本系の諸本と、赤木文庫旧蔵絵巻を代表とする絵入り写本系の諸本とに分かれる。それぞれの系統に小異のある異本が現存しているが、本書は、それらの二系統とも本文が相当に異なる異本である。元は、横型の奈良絵本であるが、残念ながら挿絵は取られている。本文は、誤写が多く、読みづらい所も多いのだが、本文研究には、重要な異本となるので、ここに翻刻紹介する。

本書の書誌は以下の通り。

所蔵、慶應義塾大学国文学研究室蔵

番号、JL・2A・1029

形態、元奈良絵本、二冊

時代、江戸前期写

寸法、縦一六・七糎、横二四・一糎

表紙、紺地金泥表紙（後補）

見返、金銀切箔散らし斐紙（後補）

外題、ナシ（後補白紙第幾あり）

内題、ナシ

字高、一三・一糎

料紙、斐紙

行数、半葉十二行

丁数、上三十三丁、下二十二丁

挿絵、上八頁分、下八頁分（すべて欠）

奥書、ナシ

印記、「瀧川氏図書記」「宮崎蔵書」「小寺氏蔵書印」

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」・『』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。

「月日の本地・上」

そもく、三せんかひをくまなふてらし給ふ、月日のちをたつね申に、ちうてんちくのりんこくに、ちやうしや一人おはします。なをは、りんこちやうしやと申なり。とうさいなんほく八十りに、こかねおもつて、四十二のものなたて、かたきのよせくるときは、一こゑほゆれば、せん人むなしくなるあくしうを、百ひきかわれける。我におとらぬちやうしや、百人はかりめしつかはれ、そうして、なんによのけんそく申におよはず、なにかにつけても、ともしき事なし。

さりとは申せとも、なんしにても、によしにても、御一人なかりける。ちやうしや、つねく、おほしめすやう、「こんしやうのゑいくわは、みつのうへのゆきのことし。ゑんまのつかいきたんて、くわうせんのためにおもむかんに、すまん人のけんそく、かすくのたからもなにならず。けうしなれば、ほたひをとうへき物もなし」と、かなしみたまふ。

ちやうしやのねうほう、此よしをきこしめし、「ま事にことわり」とおもひ申されければ、しよふつの中に、とりわけ、くわんおん、三十三へんに身をへんし、十九せつほうにのりをとき、しゆちやうのねかひをみてすんは、なかくしやうかくをとらしと、うけたまはり候へは、これよりみなみに、八十りのたけはやしあり。その内を、八ちやうはかりにきらせて、七けん四めんいたうなたて、こかねをもつて、くうてんをくみ、てんしやうをはり、せんしゆくわんおんを、こんとうにつくらせてまつりければ、なをひかりたうとかうす。十の物十、百のもの百、

せつの物せつのたからをつくして、くやうをなす。

ちやうしやふうふ、ほんそんにまいり、ねんしゆ申けるは、「大し大ひの御ちかひこそ、たつとけれ。かれたるそうもくむかつても、くわんおんのみなをとなふれば、花さきみなるとうけ給候。我は、けうし一人きつけ給へ。まい月十八日ことに、くわんおんほつを、きやう三十三まんくわん、よみてまいらせん。つきに、にしきのみとちやうを、まい月三十まい、七ねんかけてまいらせへし。あけのいとにかみをゆい、しんめを七ひきつゝ、月事に七ねんひかせてまいらせへし。それになはぬ物ならば、こかねをもつて、たかさ五しやく二すんに、おしやうたいを、まい月三十三まいませて、七ねんかけてまいらせん」と、三十三とのれいをなし、きやうをよみ、きせい申されけり。

七日と申あかつき、すこしまとろみ給ふところに、かたしけなくも、くわんおんは、八十はかりのらうそうとけんし、おほせけるは、「なにといのるとも、かなふまし。ゆゑをいかんとゆふに、身つから、さきのよに、りんこくの山に、ふうふすみしとき、やま鳥のこをととり、こともにふくせしに、あるとき、山とり、すのうち、こを又うまんとするところを、鳥ともにうちころし、こしらへてみれば、はらのうちに、つぶなるこあまたありしをみて、ほたひしんをおこし、ねんふつと申、きやうをよみたりしゆへに、かゝる人とはうまれたれとも、万の鳥のこをととりて、こともにふくさせしつみのゆへに、こたねあるへからす」と、御たくせんありければ、ちやうしや、かさねて申されけるは、「さてこそ、たゝいま、大ち大ひの御ちかひおは、

たのみたてまつれ。我むなしくかへり候事、あるへからず。たゝ、ふつせんにて、なにゝもなし給へ」となけき申せは、あわれとやおほしめしけん、花を二多たりいてゝ、ふうふにたひたまふ。なのめならずによるこひ、しゆくしよへかへりたまふ。

〔挿絵・第一図・欠〕

きたのかた、やかて、くわいにんして、七月のわつらひ、九月のくるしみ、十月と申せは、さんのひほをとき給へは、たまのことくなる、わか君にてそおはしける。

ちやうしや、よろこひ給て、なをは、ふわう殿とそ申ける。もり、めのと、そのかすしらすそたてまつり、いつきかしつき給ふ事、かきりなし。

さる程に、あくるとし、又くわいにんさせ給ひて、月日をふる程に、ほとなく、さんのひほをとき給ふ。とりあけみれば、これも、わかきみにてそおはします。ちやうしや、なのめならずによるこひたまいて、なをは、さんさうとのとそつけられける。

かくて、ふわうとののは五、さんさう殿は四になりたまふ、はるのころ、はゝきみ、かろき身に、おもきやまひをうけたまひし。かきりとはいへとも、たいさへほくおまつり、しよふつしよしんにきせいをかけ、ふうらのくすりをふくしたまふとはいへとも、そのかきりにやありけん、いまはかうと見へしとき、二人のわかきみをちかつけて、のたまいけるは、「あわれやな。このもの共、十五、二十までもそわすして、くわうせんのたひに、おもむかんこそかなしけれ。我むなしくなりなは、やかて、まれ人いらせ給らん。こゝろをつくして、みやつかふとも、ま

ことのおやににへからず。そのとき、ひやうふしやうし、たちかくれ、ほたひのはゝこいしやと、なげかん事こそかなしけれ。人には、さんごしんはくとて、三のたましいあり。しんはくは、めいとへゆけとも、こんはくは、からたにそうときくなり。身つから、くさのかけにて、きかん事こそかなしけれ。さりとは申せとも、めいとのかかひひまもなし」と、これをかきりのこととして、おしかるへきさかりかな、二十七と申せは、ついにはかなくなりたまふ。

ちやうしや、むなしき御くしをひさにかきのせ、おなしみちにて、なげかれける。さるほどに、おちめのと、いやしきしづのめにいたるまで、なごりをおしみ、かなしみ、おめきさけふ事、たゝ、けうくわんちこくに事ならず。

〔挿絵・第二図・欠〕

なかに、あわれなる事をとゝむるは、さんさう殿にとゝめたる。いつものきんでんきよくろうのどこにふし、ねむりにいらせ給ふところへ、てむなしきちふさにてをかけ、おしおとろかしく、ふくまんとしたまうところに、ふわうとの、御らんして、おとなしやかに、「いかにや、さんさうとの。きのふまてのねふりこそ、たゝかりそめのゆめなれば、さむるほともあるへけれ、けふよりのねふりは、さむる事ありかたし。なにとおとろかし給ふとも、かなふまし」といゝあへす、わつとなく。

さんさうも、なにとやおもひけん、なきかなしむ事かきりなし。この事はを、きく人見る人、「あわれなる事かな。五や三にても、かゝる心はありけるそや」と、いよくたもとをぬらし、そてをしほらぬ人はなし。

きのふまでは、七夏のひやうふ、八夏のきちやう、九の夏の
みす、十夏のまんのうちにて、いつきかしつき申せとも、めい
かわりければ、かきりあるのへのおくり、いたわしきかなや。
むしやうのけふりとなし、三日と申せは、こつをとり、七日よ
り日かす事に、御とふらひかきりなし。百か日まで、ねんころ
にとふらひ給ふ。

ふわう殿は、まい日、六くわんのくわんをんほんをよみ、ね
んふつを申、夜もすから、ひめもそにとむらひ給ふこと、申に
およはず、あるときは、せうかうをし、花をさくけ、ちふつた
うへいらせたまいて、ふわうさんさうもろともに、「なむや、大
し大ひのくわんおん、あかてわかれまいらせし、はくこせん、
しやうとう、しやうかく、とんせうほたひ」とゑかうし、とふ
らひたまふ事ひまもなし。

〔挿絵・第三回・欠〕

さるほとに、ひとりわたらせ給ふへきにもあらずして、くわ
んはく大しやう大しんのひめきみを、むかへける。ねうはうた
ち、殿はら、そのかすをしらす、ろしくしてきたり給ふ。

あるひのつれ／＼に、むかへ給ふきたのかた、めのとに、き
りうのつほねと申物の、しうてんのたちいて、にわのおもて
を見わたせは、五六はかりなるわか君の、あしたの露に袖ぬれ
て、色／＼の花にたわふれて、あそひ給ふを見てまつる。

「いつくしの上たちや」といへければ、おはします人、「これ
こそ、さきの御せんの、わすれかたみにてをはしまし候」と申
せは、きりうのつほねき、ときならぬ、かほにもみしをちら
し、いそぎ御せんへまいり、「いかに、きこしめし候へ。なきは

のわすれかたみの、ふちうさんさうとて、二人おはします。い
かゝあらん」と申ければ、御せん、「それは、いか」とありけ
れば、つほね、申けるは、「ちやうしや、かみにもほとけにも、
なり給候わんのちは、この人こそせいしんにて、りんこ殿と
ゆわれんときは、御せんは、もとのみやこへかへらせ給へ」と
申せは、「ともかくも、つほねのはからい」とありければ、「さ
うけ給候」とて、たいとおもとめて、我きみたちに、たより
をねらひ、七とまでまいらせけるに、かたしけなくも、我きみ
たち、あけくれは、くわんおんをらはいはいし給ふゆへに、七す
んのいたちとけんし給いて、とくをふくし給ふ程に、ふわうさ
んさう、とくにもおかされず。

さて、「程のひ、いかあるへき」とおもひて、「二人、きを
うかひ、一かたなにかいせはや」とおもひ、まふりかたなを
袖のしたにかくし、あけくれ、しかるへきおりふしをねらひ申
に、あるとき、ちふつたうへたち入、ちそののくわんおんの御
まへにて、きやうをよみ、「なむや、ふたらくせん、けうしゆ、
くわこしやうりやう、とんせうほたひ」とゑかうして、くわん
おんをむねにひきあて、すこしまとろみたまふところに、な
さけなくも、おもひきり、きりうのつほね、しかるへきひまと
おもひ、もちたるまほりかたなをぬきもつて、たひとかなな
さしとをす。

いたわしや、すこしまとろませ給ひしかは、こゑ、わつとき
けひ給ふ程に、あしけなききりうのつほねも、あわてゝかたな
をぬき、らぬていにもてなして、いそぎ御せんへまいりける。
さる程に、ふわう、夢うつともおほしめさす、あわておき

て、見たまへは、むねにあてゝまところみ給ふ、くわんおんほんを、のころところもなく、みなくさしとをしたり。

されとも、ふわう殿の身には、すこしもかたなたゞさりける。これも、くわんおんのちかひに、「りんきやうよくしゆしゆ、ねんひくわんおんりき、たうしんたんたん多」ととき給ふ、いまこそおもひしられたり。かの我きみ、いよくしんかんきもにめいし、かつかうおこたる事なし。

かさねて、つほねまふやう、「ときひをうつしてはかなうまし。ちやうしや殿を、いつかたへも、すこしいたしまいらせて、そのるすに、たばかり申さん」とて、

「挿絵・第四回・穴」

御せんの御まへにまいり、申けるは、「きたの御かた、にはかにやまひのゆかにふしたまひ、いまをかきり」とのたまひ、ちやうしや、「いかに」とひたまわんとき、「ちひやうにちむねをやみたまひ候か、このたひは、いつよりもかきりと見へたまふ」と申は、くすりをたつねたまわんとき、「これよりにしにあたりて、ひをうせんとて、山あり。この山にこそ、むねのくすりも、ふしのくすりもあるなれ」と申へし」といふところに、そのことくに、おほせける。

ちやうしや、きこしめし、「さらは、人をつかはし候はん」とありければ、つほね申けるは、「いやしき物ゝとりにのほり候へは、候はず。御せんに、こんしやうの御心さしをおほしめし候は、御身つから、御のほり候へ」と申ければ、「さらは、もつとも」とて、いたわしや、ちやうしや、たはかりけるをは、ゆめにもしらすして、すまん人のけんそく、きそうかうそうおそ

ろへ、ひをうせんへのほり、なきくすりを、しよふつしよてんに、ふつくをさけ、たんをつき、七日か程こそいのりける。

さるほに、きりうのつほね、よろこひのゑみをふくみ、申やう、「我らかねかひこそ、かなひて候へ。しよせん、ふわうさんさう殿の、めのとのしゆつなをめて、かすのたから物をひきて物にして、かいたてまつらせん」と申ければ、御せん、「もつとも、さるへし」とて、しゆつなをめて、さんかひのちんふつ、こくとこのくわしをとゝのへて、ようかんひれいの、いまたはたちよりうち、はたちあまりの、ねうはうたちをそろへて、しやくをとらせて、さけをすゝめ、ひそかに、きりうのつほねをいたし、かしらとして、うたおうたいもてなし、さけ

もすへになりしとき、御せん、御しゆを御ひかへありて、のたまひけるは、「いかに、しゆつな、ようの事きゝ給ふへきならば、此さけみなのみ、まいさしせん」とありければ、「なに事にも候へ、身にしたかひ候事ならば、しさいあるへからず」と申ければ、「御身のためには、いとやすき事なり」とて、「十物十、百物百、せんのものせん、そのほか、こかねのくら二十くちまいらせん、ちやうしやになり給へ」とて、かたしけなくも、身つから、御さかつきに、てうしをとりそへて、御しやくにて、さけをしゆつなにすゝめ給ひけるところに、よききけんよとおもひ、きりうのつほね、のたまひけるは、「よの事にて候はず。ふわうさんさうしなひて」とありければ、これをうけ給候て、のみけるさけのあちかひ、申やう、「御せんのすみ給ふくにはしらす、りんこのならひとして、しゆうのくひ、うつためし、いまたしらす」とて、御せんにつみけるかすのたからを、ふみ

ちらし、させきをたつ。

つほねきゝて、「おほせをこそ、そむき申さめ、御まへにて、ひろういたしたるふしきさよ」とて、御せんのか、めしくせられしさふらひとともに、おほせつけられ、しゆつなかもとへおしよせ、うしなわるへきにさたまりける。

〔挿絵・第五回・欠〕

さりとて申せとも、つほね申けるは、「何をあんしいたして候。いかにたけきものゝふも、てうあひのねうはうのゆう事をは、三に二とはきくなれば、かのしゆつなかねうはうをめし、さんかいのちんふつをとゝのへて、御しゆをすゝめて、そのゝち、かすのたからをつみ、さんくしゆきよくおとりいたし、『ちやうしやになりたまへ』とて、ねうはうにとらせ、のちにおほせけるは、「ふわうさんさうを、つまのしゆつなとあひたいし、かいてまいらせよ」とありければ、ねうはう、なのめならずにゑみをふくみ、いそきかへりて、しゆつなにかたりけるは、「御せんのおほせにしたかい、御身、ちやうしやになりたまいて、くるまにのらせたまひ候はゝ、身つからは、こしにのりて、『御せん』とあをかれん事、なにのしきひか候へき。人けんのよをすくるは、さんそくかいそく、ようちかんだうへおしてたにも、よをはわたるなり。ましては、かほといとけなき、ふわうさんさうおうしなぬ、ちやうしやになり給へ」といゝければ、しゆつなきゝ、おもふやう、「けにも、人のよをわたる事は、みな、こゝろのてうはうなる。ことに、てうあひのねうはうのいふ事なれば、うしなひまいらせはや」と思ひけるか、よくくしよほうおくわんし申やう、「こんしやうのゑいくわは、さんしせつ

なのうちなり。てし七しやくさつて、しのかけをふます、まして、三世のちきりにて、しうとなり、おやとなるは、八百しやう、さいしとなるは、七百しやう、しやていとなるは六百しやう、きやうたいとなるは、五百しやう、いちかのなかれをくむ事は、二百しやう、いへのうちのたひ人は、百しやうのゑんなり。まして、しゆうとなりけ人となつて、いかてうしなひたてまつるへき、ねうはう」とて、おうきにはらをたちければ、「いのほんもんはいさしらす、か程におほきたからをとらさざらんは、たからの山に入て、むなしくかへるかことし」と申ければ、しゆつなききて、「ふかくなる物にあひくして、かなうまし。かうなる人にそひたてまつり、ちやうしやになり給へ」とて、ゆきかたしらす、おしいたす。

〔挿絵・第六回・欠〕

ともたち、ほうはい、「けんしんのしゆつなにしてられたるねうはうに、めなかけそ」とて、もんこおとちておしいたす。ならひのくににて、そてこいしてそ、めくりける。きりうのつほね、このよしきゝて、「ときをうつしてかなうまし」とて、御せんめしくしてわたらせ給ふさふらいとも、しゆつなかもとへおしよせ、さんくしゆせめたゝかふ。もとより、しゆつなも、かくあるへしとゆめにもしらす、つわものとも、おゝくもなかりけり。しかりとはいへとも、こゝやかしこにて、五十人百人、あるいは、二百人三百人、たかにうちしにす。しゆつな、「いまははや、かなふまし」とやおもひけん、おうてへなのりけるは、「御せんかたのつわ者に、我やとゆわんもの、しゆつなとうちあつて、こんしやうのおもひてにせよ」とて、

よはわりけるところに、御せんかたのつわ物のなかに、むらさきすそのよろいきたりける物の、一きすゝみいて、はせあひひつくんで、たかにせうふをけつす。

いたわしや、ふわうさんさうは、御身のうへとは、つゆはかりもしらせたまはて、「こはなに事そ。ちやうしや、ひおうせんへのほり給ふ御るすに、らうせき、いかに」とのたまふところに、たけきものゝふとも、われさきに、ふわうをうたん、さんさうおうたんとす。

しかりといへとも、いまた四五のわかきみの、ようかんひれいなるか、いまをかきりとおもひ、てんにあふきちにふし、「めのとのしゆつなはなきか」と、おめきさけひ給ふをみまいらて、我もくさきにかいしたてまつり、しうの御せんにちうせつに申さんとおもひしつわものも、ゆわくなり、いつくにたちをたてへきやうもなく、たおれふし、かたなにたちをからりとすて、「あまりになさけなき御せんかな。か程にいとけなく、ようかんひれいなるわかきみおは、うしなひ申へき」と、みなとうしんにそ申ける。

さて、あかつきにあらされは、いけどりたてまつり、「たゝいまいしたてまつらんも、じやけんなり。いかゝせん」とせんきす。ある人申やう、「すこしもいきやのひさせ給ふ」とて、さかいはまへ、むらかみのせうをめして、二人のわか君をあつけたてまつり、「いかならんしまへもなかしすてよ。しからんすは、ふかきうみゑしつめ申せ」とて、かのせうにあつけられたり。

しうの御せんの御まへにては、あひのこるらうとうとも、と

うしんに申けるは、「二人のわかきみおは、おほしめすまゝに、かいしたてまつり、おなしきしゆつなもうちにす」と申ければ、御せんをはしめ申、きりうのつほねは多みをふくみ、よろこひ給事かきりなし。

しかる程に、しゆつなかけにん、あひのこるゆみやには、かけおくれたるものとて、ちやうしやのわかたうも、しうのわかきみうしなわれたる、御せんのさふらひとものかたへ、おしよせくうしなふほとに、あわれなる事かな、しゆつなかもとへおしよせていきおけるものともは、一人ものこらす、あなたへおしよせ、あなたへおしよせ、たゝかう程に、二せんよきこそうたれけり。

かくて、あわれなる事かな、ふわうさんさうは、むらかみのせうかもとにして、「めのとこいしや、もりこいしや、しゆつなはいづくにあるぞ、つれてゆけや」とかなしむ。

かゝりけるところに、ふわう殿おきなをり、そてにあまるなみたをおしとゝめ、「なむや、大し大ひのくわんせおん、たとい、つるきのさきにかゝるとも、きやうたいは、らいせにては、はゝこせんのましまさんところへ、むかいとり給へ」と、おとなしやかに、ねんしゆ申されければ、一もんふちのせうも、袖をかをにおしあてゝ、なけく事かきりなし。

さて、あるへきにあらされは、かのせう申やう、「きのふ、つりのために、しをみつしまへこへ候へは、はゝしやうりやうこそ、しまにおはしまし候へ」と申ければ、二人のわかきみたち、はゝしやうりやうのわたらせ給ふときく程に、「なげきの中のものこひかな。たとへ、らせつきのくに、又かさねて、なげきを

しほみつしまなりとも、わたらはや」とおもひ、きやうたいにも、たゆふかそてにとりつきて、「いかならん、ひのうち、水のそこなりとも、はゝたにいらせたまはゝ、いそかせ給ふ御ありさま、物によくくたふれば、としよにおもむくひつしのあゆみの、ちかくなるに事ならず。

きのふまては、れうらきんしうに身おまとへ、花のにほひかゝやき、月にそなれ、花にたわふれ、我におとらぬわか共、せんにあまたひきくして、ちくはにむちをうち、あそひたわふれ給いし身の、たゞきやうたいはかりともないて、かたわれふねのくちぬるに、しきもならはぬこもをしき、二人をのせ、せうは、ろをと、ゑいやこへをあけはてゝ、いつくとしらなみに、うきしつみつゆくほとに、しまかあらぬかと思へけるおきにて、いたわしき御事かな、二人わかきみお、せうひきよせ、かやてのことくなる御て、りやうのあしをひとつに、あらけなきなわにていたしめ、おうきなるいしをこしにつけ、うやう、「いかにや、わかたち、きこしめせ、御身にまゝしきはゝこせん、『二人ながら、ふかきうみにいれ申せ。さもなき物ならば、中もろ共に、たちまち、かふへをはぬへき』とうけたまはる程に、『かなふまし』と申せとも、又、よの人にほせつけらるへしと思ひ、二人をうみにしつめ申、ほたひのたねとなさんとて、これまてくそくし申なり」とかたりければ、

〔挿絵・第七回・欠〕

あわれなる事かな、たゞいまかきりとなるへき身の、よのつねのせいふつとこゝろへて、「にはの花をもきるへからず。あしき事をもなすへからず。もりのしゆつなは。めのとこいしや。と

のはゝ共はいづくにぞ」ふししつみなけき給ふ、ありさま見るに、めもあてられず。さけなきせうも、ふねの内にたをれふし、なけく事かきりなし。

やゝあつて、おきなをり、「いかにや、きみ、たゞいま、しつめまいらせんと、おもひきりぬれと、あまりなけき給へは、しまにあけおきまいらせん」とて、あしてをゆいけるなわをとき、こしにつけるいしをとりしありさまを、よくく物にたとへれば、ちこくにおつるさい人お、あはうらせつのせめに、てんちうてんさくちうかいかさも、いかてこれにはまさるへき。

「是にうちおき申さん」とすれば、きやうたひの人々は、「これは、ゆめかうつゝ。あしいたや、こしいたや。いかにや、さんさう、身つかからか身をおきて、なんちかいまのなけきなり。山にましますちゝとはしまさんに、かほとこの事はよもあらし。めいとにましますはゝこいし」と、なけきかなしむ事、ま事に申もおろかなる。

此ちうを、いまは、てあしをゆるめられ、ふたりの人々は、ふしおかみ、「いまよりのちは、もりやめのとの夕事をも、よくくきくへき。はんしや、たすけ給へ」とて、又もせいかうと心へて、くときことのみおほせける。

かくて、このしほ水しまと申は、ひる六ときは、しほひてしまとなり、よる六ときは、しほみちてうみとなるといへとも、すこしもたすけうさんために、又ふねをこきゆくに、うしほくもりに、わたつうみの、そこもしらぬおきつふね、こかるゝおもひ、いかはかり、しほ水しまにつきにけり。

さて、我きみをはしまにあけ、「これにて、はゝ御せんをまち

たまへ。みやうにち、むかいとまいるへし」とて、たゆうは宮こへかへりけり。されは、たゝいま、うみへしつめ申さんとせしかとも、みやこへかへりけり。されは、たゝいま、うみへしつめ申さんとせしかとも、みやこへかへるといふ程に、ちうかなりをなしみつゝ、「つれてゆけ」とかなしめとも、こきいたしたるふねなれば、ちからおよはす。

さる程、きやうたいは、いさこをあつめて、たうをくみ、もくつをかきよせ、ついちをつき、たにゝくたりて、みねにのほり、「いつや、はゝ御せん、わたりたまはん」と、ふししつみなけくとも、此世の人にましまさねは、いつきたるへきにもあらず。たまゝこととう物とは、ほのかに見ゆるつりふねの、よひたへかすかにて、いそのち鳥のなくまでも、我おもひかとうらみわひ、身にしむかせのおとつれも、こいしき人のたよりと、てんにあをきちにふし、なけくともかいそなき。

あわれなる事かな、せきしつなみにかたふけは、何おうしまのわざなれば、したいにしほみちくれは、かしこのみねにのほり、たかきところをたつね、あなたにゆき、こなたにめぐり、おめきさけへとも、もとよりしほ水しまなれば、みねもなく、たにも見えず、すこししまの見へけるところにあかり、ふわう殿は、さんさうおひきよせ、かみかきなてゝのたまひけるは、

〔挿絵・第八回・欠〕

「いかにや、さんさう、きけ。いかなるつみのむくいにて、たまゝ、うけかたき人けんになられたれとも、いとおしみのほゝにおくれ、いまた、そのなけきもあかさるに、まゝしきはゝにくまれて、ちやうしやにもすてられまいらせければ、おちも

めのとも何ならず、いまの夜、のちのよまでも、きやうたいはかり、此しまのうしをにひかれ、はてしらぬうみのもくづとならん事も、よくゝなけく共かなふまし」と、おとなしやかに、いゝもはてす、もみちのことくなるりやうのをあわせ、「此こどくにかつしやうせは」とて、さんさうのをとり、おとなしく、きやうたいとゝもに、かつしやうしたまへは、程なく、こしをすつる程に、しほ水きたりしに、ふわう殿、いまをかきりと思ひ、「なむ、なんほうふたらくせつのけうしゆ、大し大ひのくわんせおん、ほんくわん、あやまりたまはて、はゝもろともに、一ふつしやうとにむかへとりたまへ」と、りやうかんをくいふさき、きねん申されければ、もとより大し大ひのちかいなれば、あわれにおほしめし、ちそののくわんおん、ひとつのゆわとけんし、しまのいたゝきにたち給ひしに、ふわう、めをひらき見れば、たかきゆわひとつ、あらわれたりし程に、よろこひ、さんさうかてをひきて、このゆわにのほり、夜もすから、なくよりほかの事そなき。すこしまとろむひまなければ、こいしき人をゆめにたに見えず、かなしけれ。これも、くわんおんのゆわとけんし、ふわうさんさうに、ひうすいのくをまぬかる。

〔月日の本地・下〕

かゝりけるところに、はゝしやうりやう、ゑんまのまへにまいり、なみたとゝもに申されけるは、「あわれ、いとまを給候。わかしやはにかへり、二人のけうしたすけ、ほたひをとわれん」と申たまへは、十わう、あわれにおほしめし、「さらは、いとまをとらせん。たゝし、なんちかからたは、けうやうてなし。何

に、か、たましひをやとてかへすへき」とて、たつね給へは、おうきなる鳥ありける程に、かの鳥に、たまいしをやとし、かへされ給へは、しほ水しまへとひきたり、見給へは、いたわしや、二人の我きみは、きのふすぎ給ふまで、何にもふくしたまわねは、たかきゆわによりかゝりて、とてをかたにかけなけく。こしろもたへはて、物もいわす、なきいたりしか、大鳥のすかたを見て、「これやこの、てんまはしゆん」とおもひける。

心なきに、おお鳥、はをひらき、なきをおさへいいけるは、「いかにや、ふわうさんさう殿、おそろしくはおもひそ。あかくれこいしくおもひし、はゝにて候」とありければ、きやうたいのものともは、おそろしくおもひし心をひきかへて、はゝとゆうかうれしさに、たをれまろひ、おゝとりのはねかいにとりつき、「いかにや、はゝ御せん」とて、なくよりほかの事そなき。

かくて、ふくさせへきものもなかりければ、「おもひいてたる事あり。なんちかちゝちやうしやは、たはかられ、ひおうせんといふ山へのほり、なきくすりを、かみやほとけにいのり、ふつくをさゝくる程に」、「ひおうせんへとひこへ、このふつくをとりしに、ちやうしやはしめ、けにん、きそうかうそう、「あらおそろしのおゝ鳥や。ふつくをとる。それ、いて、とれや、とのはゝ」などゝ、いゝけれとも、ふつくをとり、とひかへり、きやうたいをはくゝみ、夜あければ、ひおうせんへとひ、ふつくをとり、くるれば、しまへかへり、りやうのはねのしたに、二人をおき、風をふせき、あけくれければ、つなかぬ月日なれば、十日あまりになりけり。

もとより、なきくすりなれば、いのりうけさるところに、ち

やうしや、ふわうさんさうの身のうへを、あしさまにゆめにみて、とりあへす、みやこへかへるところに、二人の我きみ、ならひにしゆつなをはしめとして、うせたるよしきゝ、ふちにあふみをもみかへるよしをうけ給候。

つほね、御せんに申けるは、「かくては、いかゝあるへき。御せん、我らもろ共に、たひのいてたちして、月みのていにまろひふし、なげかせたまわは、ちやうしや、『いかに』ととわせたまはんととき、『此二三日のさきに、たんとときひちりの御とをり候いしか、けをよませ給ひし程に、うちへいれ申、ときをすゝめ申せしに、二人の我たちをかとわけて候。あら、ふちうさんさうこいしや』となげかせ給へ」とて、つほねをはしめとして、めしくせし、ねうはうしゆ、めのとにいたるまで、とうしんになげきけり。

さて、ちやうしや、うちへ入たまいしか、「けうさめ、いかなる事ぞ」とてありけるに、きりうのつほね、さきの事く物かたり申ければ、ちやうしや、袖にあまるなみたをおさへ、「ふわうさんさうかもりは、いかに。めのとはなきか。しゆつなはいかに」とのたまへとも、こたうる人こそなかりけり。

やゝありて、さきの御せんのめしつかわれし物、しのひやかに申けるは、「いかなる御とかにや、我きみたちは、むらかみのちうか、いつくのしまへやらん、なかしすてまいらせ候」と申ければ、きゝもあへす、かのちうのものへといてられけり。

さる程に、ちうをめして、御たつねありしところに、ちう申やう、「御せんのつほねのはからいに、『うみにしつめ申せ』とありしかとも、あまりいとけなくおはせし程に、しまにたすけ

申」とかたり申ければ、「さらは、しまへこへ、たつねん」とて、ふねにのりたまへは、ゆくゑもしらぬたいかみなれとも、ちやうしやのこへさせ給へは、すまんそうのふね、われは水もみゑすそ、こきならふる。

我さきにふねをつけ、「わかきみをたつね申さん」とすゝみしを、ちやうしや、御らんして、「身つからよりさきに、たれにても候へ、しまへあかるへからず。我ひとりしまへあかり、つかぬすかたをも見ん」とて、しまにめぐりみたまへは、きのふけふ、かのですさひかと、いさこをよせて、たうをくみ、めくすをあつめて、ついちをつき、ここやかしこにあとはあれ共、ぬしは、ちやうしや、みねにのほり、たにゝたりこゝやかしこの木のもと、くさのかけ、かきわけゝみ給へは、ひおうせんにてふつくとりし、おう鳥こそ、はねのうへにかおゝかけ、さめゝとなぎいたる。

ちやうしや、ふしきにおほしめし、ちかくたちより見給へは、りやうのはゝかかいのしたに、二人の物をかくしけるを、おしのけ、「いかにや、ふわうさんさう」との給へとも、ならはぬしまのすまいなれは、やせおとろへて、しはらく物もいわせたまわす。

やゝあつて、ちゝちやうしやにすかり、なけきたまふ。ちやうしやもも、とりに物をいふへきひまもなく、なかせ給ふありさま、たとへやるかたもなし。

〔挿絵・第九図・欠〕

かくて、二人のことも、ちゝに申けるは、「これなる鳥こそ、しやうりやうにてまします。我らをたすけんために、ゑんまわ

うにいとまをこい、この十日あまりに、このしまにわたり、ふたたひ我らをはくゝみ給ふ」と申ければ、ちやうしや、きこしめし、「あわれなる事かな。しやうめいかわりたれとも、ま事に、こともはふひんなりけるそや。まして、身つから、いかておろかはあるへき」と、なみたとゝもにのたまるければ、おう鳥のすかたなれ共、たましいはもとのつまなれは、ま事におもはゆけなるけしきにて、なみたをおさへ、のたまいける。

「うたて、ちやうしや、つまはいくたひみかゆるとも、ふわうさんさうは、二たひみかへましきに、いまの御せんのみまゝしきゆへに、あけくれいつわりをのたまへは、とかなききやうたいを、ちたひもゝたひ、うしなわんとさせ給ふ事、ま事に御せんうらみはなし。たゝ、ちやうしやこそ、なきけなくはわたらせ給へ。此十日あまりは、ひおうせんにてふつくをと、やしなるて、二たひけうしをまうくるなり。心にまかする物ならば、此もの共、十五や二十になるまでも、そはまほしくはおもへとも、くわうせんちうのみちなれは、なけくともかなふまし。めいとどのつかい、ひまもなければ、いとま申て、ちやうしやとの。とりわけ、ふわうさんさう」と、とを山鳥にあらねとも、へたつるみちのかなしきは、かきけすやうにうせたまへは、

〔挿絵・第十図・欠〕

「こはそも、ゆめかうつゝかよ。ゆめならば、さめてのちはいかゝせん。とても、うき世のならひなれは、おくれさきたつ身のゆくすへ、まゝしき中の事なれは、けふありとても、あすをしらす。あけなはずかたは、わたりかぬへき身なりせは、つれてゆかせ給へ、はゝ御せん」と、ふししつみ、かなしみ給へ

は、ちやうしやははしめ、しまもとこもなく、なみいたる人々、袖をかをにおしあて、なくよりほかの事はなし。まさに、ろくしゆ、しんとうするともおほしたり。

かのものとも、あまりになげきしを、物によくくたふれは、りやうしゆせんの、しやくそのの、さらしやうしゆの木のもとにて、ねはんさせたまいに、よならず、五百らかんの五十二間の物どもの、ほとけのなこりをなしみ申せしも、いかてこれにはまさりへき。

かくて、あるへきにあらされは、ちやうしや、二人の我きみをひきくし、宮こへかへり給へは、

〔挿絵・第十一図・欠〕

よろこひにもなみた、つらきにも、さきたつ物はなみたなり。ふちにあふみをもみあわせ、いそかせ給ふ程に、ほとなく宮こへつかせ給ひて、しゆつなをはしめ、もりめのと、のこらす、そのほか、ちやうしやのつわ物二百よき、御せんのはかり事にてうしなはれ、かの物とも、あるいはおや、又あるいはことも、又はきやうたひ、おもひく、こゝろくに、「うたての御せんや。かゝるいとけなき二人、うしなわんとて、おやきやうたい、あるいはこそ、うしなふ事かな」と、ちやうしやの御もとへきたり、なん女くんしゆして、おめきさけひけるは、けうくわんちこくもかくやらん。

さて、ちやうしや、のたまいけるは、「ふわう三さう、もりめのと、そのほか、くんきやうのつわ物、おくうしないける。かたきの御せん、きりうのつほねをはしめ、かすのねうはうしゆ、ならひに、中の物、はした物、一人ものこらす、我うた

れけるつわもの、おやきやうたい、ことも、おもひくに、とうのゆひ、てあし、かうへを、をのくきりとりうしない、おやきやうたい、ことも、けうやうにせよ」と、けちをなす程に、うしなはれるものとのしんるい、我ききにくとす、みけるを、ものによくくたふれは、ちこくにおつるさい人お、めつこつ、あはうらせつか、我ききにと、くわしやくせんとす、みしも、これにはいかてまさるへき。

しかりとはいへとも、ふわうさんさう、なみたをおさへ、のたまいけるは、「いかにや、ち、御せん、そのほかのめんく、き、給へ。我らきやうたひ、かの御せんのたはかりにて、うしなわれたり共、御せんをはしめ、ねうはうたち、すまん人をかいさせ給ふとも、我らかいのち、いきかへるへからす。このこくとく、めいとのもり、そのほかのつわ者とも、うちしにをなしたるを、いつれとても、二たひいきかへるへからす。事に、うきたとへにも、のちのおやをおやとなせとけ給候へは、ゆめくうしなる給ふものならば、たゝいま、御まへにて、さんさうさしころし、そのかたなにて、じかいして、さんつをとまなひて、こへなんものを」とのたまへは、しやうしやははしめ、我ききにかいせんとす、みし物ともは、とかくの御返事におよはす、こへもおしますなきあたり。

〔挿絵・第十二図・欠〕

こせん、きりうのつほねをはしめ、しつめ、しつのおにいたるまで、てをあけ、「ありかたのさんさうや、ふわうとのや。これほとりかたかりし我きみを、うしなまいらせんと思ひし事のあさましさよ。此のちは、ゆめうつ、も、おろかあらは、

うしなぬ給へ、ふわうとの、「ふしおかみてそなきにけり。

やゝありて、御まへにありけるものとも、とうしんに申されける。「我きみのおほせにて候へは、たすけ申。たゞ御せんをは、宮こへおくり上申候へ」とありければ、ちやうしや、「もんともしかるへし」とて、やかて、とのほら三百人はかりにて、おやのかたへそかへしける。

さる程に、かの御せん、ちゝおこそ、このよしきこしめし、「ちやうしや、しまよりかへられぬさきに、御せん、きりうのつほねをうしなへ」とて、さふらひ五百人はかりにて、ちやうしやのもとへ、つかはされしに、ろしにて、かの御せんにゆきあひて、「うけとりて、ちゝの宮こへおくり、つれまいらせてはいかゝあらん。これより、このよしを、ちうしんに申て、御返事により、つれ申さん」とて、はやうまにて、御せんのちゝのかたへ、人をつかはしければ、ちゝ、此よしをきこしめし、「ちやうしやとの、しまよりかへられぬさきに、とくこへ、御せん、きりうのつほねをかいせよとて、つかはずに、しやうしや、しまよりかへり、かの御せんをかいせつして、おやのかたへかへさるゝ。

〔挿絵・第十三回・欠〕

〔挿絵・第十四回・欠〕

けんちんのちやうしやの、いのうちもはつかしや。それにていそぎうしない申せ」とありければ、あわれなる事かな、御せん、御年二十三と申せは、たたいまいさいこと見へ給ふ。

五百人のさふらひとも、「おゝせはかうにて候へ共、いかてかかいし申へき」といゝければ、「しうめいと申まつたいのためし

に」とて、かいせんとす。

しかりといへとも、五百人のさふらひとも、御せんをむまよりおろし、見たてまつれば、ようかんひれいにして、花のかほはせに、にほやかに、かつらのまゆすみあをふして、はくふんをたやさす、られうのたもとをおゝい、すかたは、やうりうの春の風になひくる事し。かいせんとは申けれども、たけき物のふとは申せとも、「我うしない申さん」と申物なければ、「たれかいし申せ、いかにや」と、いりにて、さらにしきたひのみにて、いつをかきりとも見へす。

こゝに、しらあやおとしのほらまききたりける、むしやいきすゝみいて、申けるは、「かいし申物も、又かいし申さぬも、いつをいつまでにて、いさあるへき。その五ひやくよきのなかにも、とりわけしゆくかしよう、のかれかたき御せんに、いかなるゑんをむすひ申つらん」とて、ほらまきのうはおひきつて、たかひほはへし、かこへくそくなけてゝ、こしのかたなぬきもつて、「いかに、こせん、たゞいまかきりにておはせ候へ。ねんふつ申させ給へ」とて、我どもにねん仏申、つつとより、たけなるかみ、かひつかんで、「しやけんなる事かな。花のことくなるねうはうを、せんなの内にさしころし、そのかたなにて、とくく、しての三つの御とも申さん。たとひ、たゞいまこそ、あくゑんおむすひ申とも、らい世にはかならず、一ふつしやうとにむまれあひ候へし」と、いゝもはてす、ほらおかきやふり、ちかひする。

かのさふらいの、らうとうかともえたりしもの、一人、すゝみいて、「なさけなき御事かな。御せんの御事は、わかきみ御見

にて、まゝしきへたてもいらせ給へ共、きりうのつほねか、人々
ならば、いかてか御せんもかくはならせ給ふへき。又、われら
かしようのかたきなれ」とて、ひきさしころし、これも、その
わたなにて、はらきり、「とく、しう殿にかひつき申さん」と、
申もはてすうせにけり。

〔挿絵・第十五回・欠〕

さる程に、御せんのかたのめのと、ねうはうといふ人、あな
かは、こなたのふちへ身をなけしつめ、そのかすをしらす、う
せにけり。

さる程に、此よし、ちやうしやのみやこへきこへければ、ふ
わうさんさう、いよ／＼なみたにむせひ、「こはそも、いかなる
事ともぞ。かの御せんに、いかなるゑんをむすひ申て、かゝる
しさいあるそや。もとより、くわんおんに、かつかうおこたら
ぬゆへなれば、しちなんさんとくおりのりしやう、あらわれたりけ
るや。ちたひもゝたひ、うしなわんとせしふわうさんさうは、
しちなんをのかれらるに、かの御せん、ついには、はてさせ給
候いけるを、あさ夕なけき給候いて、これこそ、すなわちほた
いのたねなれ。ほんなうそくほたひ、しやうしそくねはんも、
いよ／＼きもにめいしたり」とて、ほんなうのかみをきり、こ
きすみそめに身をやつし、「かのまゝしき御せん、しやうとうし
やうく」と、とふらひ給へは、まさに大し大ひの御ちかいの、
七なんさんとくも、かんせんにあらわれたり。

さる程に、ちうやのかきりもなく、むしやうほたひをいのり
給ふ程に、二十一と申せは、しんけんくうしやくのことはりお

ゑ、ついにしやうふつしたまいて、きやうたい、月日とけんし、
さんせん大せんせかいを、あまねくてらし給ふも、おやかう／＼
のゆへに、しよふつしよじんのめくみ、かない給へは、しやう
ふつしたまふ事も、いとやすし。

ちゝちやうしやは、みやうしやうとなり、はわ御せんは、ゆ
うつくといふほしとけんし、めのとのしゆつなは、ふつかうし
やといふほしとなり、かけかたちのことく、月日にそひたてま
つる。

むらきみのたゆうは、我きみなかし申すとかにはつて、ゑし
やうのほしとなる。入かたしらすなりにけり。しうのこゝろさ
し、ふかきけんそく、すまん人は、みなかす／＼のほしのくら
いとけんしたり。

まゝしき御せんは、ふわうさんさうの、いくはくとふらひ申
せしかとも、いんくわのかれかたくやありけん、つゐに、めみ
すといふむしになり、又、きりうのつほねは、むくろもちとい
ふむしとなり、つち三すんのしたにすみかとして、我御せんを
すゝめ申、我きみをうしなわんとせしによつて、しうをくらし
しゆへに、むしとうまれても、つち三すんのしたを、くゝりめ
くりけり。

めみすといふむしをゑしきとし、すこし月日のひかりをみて
は、たちまちにしする事も、ほんふにてわたらせ給候いしとき
のいんくわなり。めみすというむしも、ゑんてんのときは、つ
ちのしたにもこらいかね、あらはにいつれば、みちのほとりに
て、ゆきかう人にあしにあたりて、ふみころされける事も、たゝ
いんくわにてあり。ねかひても、ねかふへきは、むしやうほた

い、とふらいでも、とふらふへきは、ちゝはゝのこしやうなり。
ことに、よに四おんあり。てんしのおん、ふものおん、ほう
わうのおん、しのおん、ほうしても、ほうしかたし。いよゝ
かうゝならん事をまなふへし。

このさうしを見、きかん人は、なさけのみちをほんとして、
つらき人にも、あたおはおんにて、ほうせんと申事わり、けに
もと思つゝ、又しゆうをもちたらんとも、からたるき、いやし
きおとこ、おふなのきらいなく、うしろまでもしんしうやまひ
は、おのつかからかみやほとけの御まほり、めもあるへく候、此
さうひとつにたんとみ申へし。おなしく事ながら、月日と申は、
ちきに、御すかたおかみ申候へは、見申ても、てをあげ、あさ
夕たつとみ申へし。あなかしく。

〔挿絵・第十六回・欠〕

(いしかわ とおる)